

### 日向国の神話と伝承 — その 1 —

宮崎県立図書館 情報提供課  
郷土情報担当 徳永 孝一

#### ○ 戦前の神話教育

明治半ばから昭和 20 年までの国定教科書にみられる神話の記述は、著作者の取捨選択(10 余異伝あり)により内容に変遷がありました。太平洋戦争直前(今から 72 年前の昭和 15 年)、国の定めた教科書(『小学国史』)に載せられた天孫降臨神話の内容は次のとおりです。

「天照大神(あまてらすおおみかみ)はニニギを我が国土におくだしになろうとして、天壤無窮(てんじょうむきゅう、天地が永遠に栄えること)の神勅(しんちよく)を下し、三種の神器(さんしゆのじんぎ)をお授(さず)けになりニニギは日向へおくだりになった、その際、『この鏡を我と思いて、常にあがめまつれ』と仰せになった」

このような神話(歴史)教育は、戦前の全国では普通のことでした。なかでも神話・伝承の比定(ひてい)地である宮崎県は、祖国振興隊奉仕活動(隊旗の 3 線は日向 3 神代を意味する)や八紘之基柱(あめつちのもとはしら、今の平和の塔)建設など、「天地と共に動くことのないわが国体の基を定める」とする国是に沿って、神話と時局を重ねた奉仕活動を行いました。ただ、そのことは戦後に反動となって現れ、しばらくは神話・伝承の影が薄くなったことも事実です。

#### ○ 戦後の神話記述

戦後に出版された高校の歴史教科書には、神話の本文は載っていませんが、奈良時代の刊行経過が以下のように記述してあります。

「天武天皇の時代(7 世紀後半)にはじめられた国史編纂事業は、奈良時代に『古事記』・『日本書紀』として完成した。和銅 5 年(712)にできた『古事記』は、宮廷に伝わる『帝紀』・『旧辞』をもとに天武天皇が稗田阿礼(ひえだのあれ)によみならわせた内容を、太安万侶(おおのやすまろ)が筆録したもので、神話・伝承から推古天皇(在位 592 - 628)にいたるまでの物語である」(山川出版社『高校日本史』2002 年)

同教科書の本文注に「創生の神々の国生みをはじめとして、天孫降臨、神武天皇の東征、日本武尊(やまとたける)の地方征圧などの物語であるが、そのまま史実ではない記述がある」とし、形を変えた史実の存在を予感する表現になっています。

#### ○ 神話・伝承と昔話

ヨーロッパで研究され日本に伝わった「神話のとらえ方」について、「神話は一般に神々についての物語で、原始古代の神聖な真実として社会や事物を基礎づけて説明している」(山川出版社『日本史広辞典』)とし、さらに伝承(伝説)は「単なる昔話ではなく、歴史的な回想を語るとともに、場所・時間・人物を特定する」と説明しています。いずれにせよ、話の内容に史実としての「信頼性がどの程度含まれているか」を重視しています。

#### ○ 古事記・日本書紀・風土記

『古事記』は 3 巻の構成で、上巻は神話の世界、中巻から下巻は神武天皇から推古天皇までです。そのため神々の物語と歴史的史実の双方をあつかっていると考えられています。『日本書紀』は舎人(とねり)親王が中心となって編さんしたもので、中国の歴史書の体裁にならない漢文の編年体で書かれています。

さらに神話・伝承をふくむ神代(じんだい)から持統天皇にいたるまでの神話と歴史を天皇中心に記しています。

和銅 6 年(713)には、諸国に郷土の産物、山川、原野の名の由来、古老の伝承などの筆録が命じられ、地誌である『風土記』が編さんされました。今日、豊後など 5 ケ国の『風土記』が伝えられています。

このうちほぼ完全に残っているのは、『出雲国風土記』だけです。『日向国風土記』は鎌倉時代後期の書物『釈日本紀』(卜部兼方著)の文章に引用されている「逸文」から、その存在が確認できます。なお、これらの史料は、十分な検討が必要ですが、古代の貴重な史料であることには間違いのないところです。



神秘的な高千穂の雲海  
(天孫降臨比定の地)